

18世紀前半の薩隅方言

田 尻 英 三

(1980年10月16日 受理)

The Satsugu Dialects in the First Half Eighteenth Century

Eizo TAJIRI

村山七郎氏により、ロシア語で書かれた18世紀前半の薩隅方言資料が『漂流民の言語』（吉川弘文館）（以下『漂流』と略称）の中に訳出されている。氏の解説をかいつまんで述べると次のようになる。

1728年（享保13）11月に、薩摩藩主松平大隅守（島津継豊）の命により、大阪に住む薩摩藩関係者に米や紙をとどけるために、ワカシワ丸（若潮丸か）が17名の乗組員を乗せて出帆した。しかし、暴風雨にあい、1729年6月にカムチャツカに漂着した。そこで、15名は射殺され、2名（ソーザとゴンザ）だけが助かり、1734年ペテルブルグに送られ、1736年から科学アカデミーでアンドレイ・ボグダーノフの指導のもとで、ロシア人子弟に日本語を教える事となった。ソーザは同年9月18日に没したが、ゴンザはボグダーノフの協力により6種の日本語教科書を著した。

- | | |
|-------------------------------------|------------------------|
| (1) 露日語彙集（アルファベット順，項目別）（以下、『露日』と略称） | 1736年 |
| (2) 日本語会話入門（以下、『会話』と略称） | 1736年 |
| (3) 簡略日本文法（以下、『文法』と略称） | 1738年 |
| (4) 新スラブ日本語辞典（以下、『スラブ』と略称） | 1736年9月29日～1738年10月27日 |
| (5) 友好会話手本集 | 1739年 |
| (6) Orbis pictus | 1739年 |

この、1717年に生まれ、1739年に没したゴンザの残した資料により、18世紀前半の薩隅方言の実態を知ることができるのである。

ここでいう薩隅方言とは、上村孝二氏のいう「南九州方言」¹⁾と同じ意味である。便宜的に通称に従った。

前掲のゴンザの著作の中で現在まで村山氏により翻訳されているものは、(1)『露日』の全文（『漂流』所収）、(2)『会話』の全文（『漂流』所収）、(3)『文法』の全文（『文学研究』66輯）、(4)『スラブ』の425項目（『文学研究』68輯）の4著作のみである。本稿は、これらの資料中から音韻の諸要素を主としてとりあげ、これらの文献の有効性を考察するものである。

主としてとりあつかう語彙は、『露日』の1233項目（その中12項目は、同語の表記上の差異だけ

によるものである。)と『スラヴ』の425項目である(『露日』と『スラヴ』の重複項目数は82である)。ここで項目数をあげたのは、前述の如く表記上の差異によるもの(例えば、ツキ《月》の *cuk'* と *cúk'* の両表記, ドケ《何処へ》の *dokè* と *dóke* の両表記²⁾, ツメ(爪)のツメ・ツメ両表記)が別項目として掲げられているが、細かな表記の区別が問題になるものもあり、各資料の量的比較のためにも、全体の語彙数としての標出項目数をあげる方が意味が有ると思われるためである。

また、原文はロシア字で書かれており、それを村山氏はローマ字と片仮名で転写して訳語をつけている。但し、『露日』・『会話』と『文法』・『スラブ』とでは片仮名転写の方式が違っている(例えば、『文法』と『スラヴ』とでは、無声化を○印で表示しない、語末の内破音のトをツと表記するなど)ため、とりあつかいに注意を要するが、ここでは特に問題となる以外は、片仮名で村山氏の資料通りの表記のまま引用する事にする。この問題については後であつかう。

村山氏は、『漂流』においてゴンザの言語の特徴を12項目あげ、柴田氏は『漂流』の書評中で更に4項目を追加している。また、村山氏は『スラブ』の解説文中に、音韻7項目・語彙分布2項目・外来語9項目・新語10項目を追加している。これらの中には項目名のみで用例をあげていないものもあるので、筆者の調査した用例を加え整理して以下に列記する(項目順は『漂流』に準じる)。また、標出の方言形と訳語との関連が不明瞭と思われるものについては、もとの語形として村山氏の注記に私案を加えて《 》で示す事にする。

(1) 音節シに続くラ行音が、タ行音に転化している(村山氏が指摘)。

シメタ(風), シタン(知らない), ファシタ(柱), カシタ(頭), シトカ(白い), シトカト(白い), シトミ タマゴン(卵のしろみ), シモバシタ(霜柱), シタガ(白髪)。

(2) テ・デがチェ・ヂェに転化している(村山氏が指摘)。

アサッチェ(明後日), バンマヂェ(晩まで), チェ(手), チェチェヤ(父)《父親》, チェデ(出納係)《手代》, チェガウヅク(手の痛風)《手が疼く》, チェゴ(編細工)《手籠》, チェカケント(完全な)《手かけないもの》, チェコブシ(拳), チェンネン(世捨人), チェンナウ(恵みをうける), チェナム(連れだつて)《連れ並む》, チェナマスル(連れて行く), チェノデ(徒党), チェノファラ(掌), チェヌキ(こて, 『スラヴ』では手袋と翻訳)《手ぬき》, チェップ(兵器)《鉄砲》, チェップンツムルシコ(弾薬筒, 装薬)《鉄砲の詰める量》, チェップノテ(武装兵)《鉄砲の隊》, チチヂェオヤカス(乳で育てる), ドシチェム(非常に)《どうしても》, デェクル(果物が熟する)《出来る》, デェクルコツ(熟すこと), デェケタツ(熟したる), フィダイノチェ(左手), フェヂェ ファシル(船で航海する), フチェコツ(扇動する)《ふといこと》, フチェコツユフト(扇動者), イチニチ フィガチェル(一日日が照る), イケンヂェム(どうしても)《いかにしても》, イッチェ(特に)《いと》, オモチェ(良い部屋)《表》, オモチェ(馬勒の上部)《ロシア語の確実な意味は不明とある》, オモチェ フェン³⁾(舳先)《舟の表》, ステェゴ(捨子), シタチェヤ(仕立屋), タマゴン ナミヂェ(半熟

卵)《卵の生茹》, タシヌヂェ (保存して)《たしなんで》。

チェップノテやフテ (額) の例を見ると, 連母音から変化した「テ」は口蓋化をおこさないようであるが, フチェコッ・チェナムの例からは oi・ue 連母音の变化形は口蓋化をおこしているのがわかる。

なお, 村山氏はイッチをイトと関連づける『大言海』の説を支持しているが, これはイッチの記載されている『スラヴ』の次の項目であるイッチョカッ・イッチコマカッ・イッチシェンショナシ・イッチイチバンなどの例からすると, イトに助詞「に」が接続縮合したものとみるべきかもしれない。逆に, 二重母音音節の变化形ではないのに, チェではなくテの形をしている例がある。(10) の e・ě の項参照。

テンマ (ボート)《伝馬》, テオイ (負傷)《手負い》, テラ (寺)

(3) 語や尾のリ・レの頭子音 r が脱落する傾向にある (村山氏が指摘)。

ファイ (針), フェエメ (宴会)《ふるまい, 『スラヴ』では同意の語としてフレメが記載されている》, グルイ (周囲), カナクサイ (鎖), キウイ (胡瓜), ケムイ (煙), アカイ (光)《明かり》, ニワトイ (鶏), トイツナ (手綱)《取り綱》, ボクイ (短靴), イカイ (錨), カサツクイ (帽子製造者), クスイ (薬), ナマイ (鉛)。

ダイ (誰), フェエ (腫れ), ワイエメ (割れ目), キエカ (綺麗)。

村山氏は『スラヴ』のイリ (ねじ錐) の項の注で, kif (霧), síř (臀), tsurbai (釣針) などの例がトイ (鳥), ヤイ (槍), アイ (蟻) の例のもう一方にあるとしている。これは r 子音の脱落ではなく, 母音の脱落であるとの説明なのであろうか。これは, 後述するように, 軟音符の有無によるイ列音ウ列音の無声化現象と深い関係を有するだけに, 氏が『文法』と『スラヴ』で母音の無声化を示す○印をつけなかった点は, 『漂流』で採られた片仮名の表記法に比べて劣るものと言わねばならない。ここでは, r 子音が脱落せず, 母音の無声化を示していると思われる用例の一部を列挙するにとどめる。

ファル (春), ファル (畑・耕地・野)《原》, フィル (昼) (にんにく), フィラダ (水差し), ファシル (走る), フォムル (褒める), フォリ (掘), ヨル (夜), クルマ (車), マズル (混ぜる), ネドコル (ベッド)《寝所》, ノリ (脳)《『会話』ではノイ》, オル (居る), ファル (張る), シリオ・シルオ (尾), シキリ (境界), タヌル (さがしもとめる)《尋ぬる》, トカギル (とかけ), トコル (所)

(4) 音節シは, 若干の語ではシュとしてあらわれる (村山氏が指摘)。

シュルシ (印), シュル (汁), オシユム (惜しむ)

シュフォニオツル (崩壊する) も《四方に落つる》の意と考えるならば, この例に入る。因みに, 「方」は中世より合音化しているので, 「ホ」の仮名には問題は無い。この現象は単にシ>シュというだけではなく, 次の各例と併せて理解すべきものである。なお, (19) も参照。

アキュンド (商人), チヂュミ (巻毛), チヂュミガミ (縮み髪), カリユド (捕鳥者)《狩

人)。

(5) 若干の語においては、語中尾のタ行カ行が濁音化している(村山氏が指摘)。

ファダケ⁴⁾(畑), フォドケ(神)《仏》, フォドケ カミノ イキ(聖霊なる神), フォドケ ムスコ(息子なる神), フォドケ トト(父なる神), ヌスド(盗人), イトゴ(従兄弟)。

(6) 語末音節の母音は弱まっているが、いわゆる「促音化」は見られない(村山氏が指摘)。この現象については、全用例が170例以上あり全てをあげるのは煩瑣なので、代表的な例だけをあげておく。また、語末のシ・ス・ジ・ズ・チ・ツ・ヂ・ヅについては、母音脱落か母音無声化かについて問題があるので、表記の問題と関連づけて後に詳しく述べる。

アクビ(あくび), ビキ(蛙), ドク(毒), アシ(足), ツブシ(膝), ツヅ(よだれ、『スラヴ』では唾と訳している), ファチ(鉢)(蜂)(皿)(八), フィャク(百), イキ(息), フォンノコト(真に), フォシ(星), イビ(指), イビキ(いびき), イシ(石)(啞), クビ(首), ユメシ(夕飯), カブ(蕪), カル(刈る), キビス(くるぶし), キク(聞く)(嗅ぐ), コブ(蜘蛛), クツ(靴), クギ(釘), ミツ(水)(蜂蜜), ミチ(道), モチクル(持って来る), ムカシ(昔), ナツ(夏), ナル(成る), ネチョル(眠る), オビ(帯), オラブ(叫ぶ), サルク(歩く), スル(為る)。

言うまでもなく、語中では動詞の促音便やロッピーク(六百)の例のように、促音そのものは別の音韻として存在するのである。

この無声化の例の中には、ファル(春)(原)・オツル(落ちる)・ヌクモル(暖まる)・サル(猿)・トカギル(とかげ)の例も含んでいる。これらは例えば、嶋戸貞義著『鹿兒島方言辞典』(国書刊行会)(以下、『嶋戸』と略称)では、それぞれハイ・オツイ・ヌクモイ・サイ・トカギイとなっている。ここでは、無声化をあらわす符号が付されているかどうかという観点で一括してあつかうものとする。(3) 参照。

(7) 同様に、語末のミ・ムはまだ撥音化していなくて母音の無声化の段階であるが、語末のヌは撥音化している。

ナミ(波), ミミ(耳), ウミ(海), アミ(網), チヂュミガミ(縮み髪), ファサミ(鉢), ゴミ(塵埃), カザム(嗅ぐ), キイエスミ(木炭片), コヅミ(堆積), クラスミ(暗黒), モミ(縦), ネツウミ(鼠), カガミ(鏡), ノム(飲む)。

イン(犬), ヤマン(狼)《山犬》

また、語中ではあるが、涙も現在のようにナンダではなくナミダとなっている。

村山氏は、『スラヴ』で逆接の接続助詞ドモがドンになっていく過程を示すというドムの表記がみられるとの指摘があるが、同様の例として、ノム(蚤)を加えておく。

(8) 形容詞はカ語尾とイ語尾の併用である(村山氏が指摘)。

『漂流』では、カ語尾形容詞は附加語的・述語的に用いられ、イ語尾形容詞は述語的にのみ用いられるとしているが、これは『会話』の用例から判断していると思われる。この点について

『スラヴ』の用例からは、次のように連体修飾格にたつイ語尾形容詞がみられるので、一概にはいえないようである。

アコネコッ (明るくないこと), フチェコッ (扇動する) ((ふといこと), フチェコッユフト (扇動者), コウネコッ (固くないこと) ((強くないこと)), トジェンネコッ (つまらないこと, 淋しいこと)。

(9) 方向を示す助詞サメ, 到達点を示す助詞ドゥイがある (村山氏が指摘)。例を補うと次のようになる。

ドコサメ (何処へ), ココサメ (此処へ), アスコサメ (あそこへ), ドクサメ (何処へ), ディョフォサメ (血方へ), アラケサメ (外へ), ナカサメ (内へ), ウエサメ (上へ), シタサメ (下へ), アトサメ (後ろへ), モスクウイドゥイ (モスクワまで)。

(10) ě と e との区別の問題 (村山氏が指摘)。

『漂流』では、e は ai・oi から変化した音や口蓋化子音の後ろ、半母音 j の後ろに使われるとされている。これに対して、柴田氏は、「ě は子音が口蓋化することを表わし、e は子音が口蓋化しないことを表す⁵⁾」としており、この方が統一的に表記法を解釈できる。

但し、この ě と e との表記の区別には例外がある事を『漂流』で述べており、3例が実例としてあげられているが、これでは資料批判としての、この文献の表記の厳密性がわからないので、改めて『露日』と『スラヴ』の全用例について調べてみると、次のような結果となった。

○ě の正用例……148例 誤用例……5例 (約3%)

正用例の一部

abáraboně (アバラボネ), akáganě (銅), amázakě (ビール), arakě (外), běci (別なこと), fně (舟), cmě (爪), cúk'ganě (つき鐘), čjugen (馬丁)。

誤用例 (ai・ei 連母音の変化したもの)

kěbo (継母), sakě (境), sakěň (境の), tókě (時計), tokěň (時計の)

○e の正用例……228例 誤用例……33例 (約13%)

正用例の一部

ábne (ほとんど…でない) ((あぶない), arajě (霰), asáčce (明後日), aske (あそこへ), afe (汗), banmadze (晩まで), ckaměcor (手に持っている) ((つかまえている)。

誤用例 (前に n 子音をもつもの、例えば、nenn・necor などが14例あるのが目立つ。)

čjugen (馬丁) ((中間), bénsaf'ib' (くすり指) ((紅さし指), děklek (主人) ((歴歴), fek' (脊柱), féso (臍), figáre (旱魃) ((日枯れ), fúre (命令) ((触れ), kám'nare (雷), fagetat (禿), juben (小便), témma (ボート) ((伝馬), teoi (負傷) ((手負い), tera (寺), gezo (下女), kefinme (着物を裏返しに)。

これらの例の中には、デンゴボネ (のどぼとけ)・タクセ (多く) のように筆者には正誤例の判断のつかないもの5例は除いてある。

用例の数は、表記の厳密性の評価を考慮して、くり返しあらわれる例についても各々1例と数える事は前にも述べた。ここでは、前掲の čjugen・čjugěn (馬丁) のように同一語でも正誤二様の表記をとるものが若干みられる事を考慮したためである。

- (11) ラ行音は r で表わされているが、6 (6・6月・6年・6000・60・600) の口は lo で表わされる (村山氏が指摘)。

この6の他に、デクレク (主人) 《歴歴》も le として l を用いている例である。

- (12) 共通語のセ・ゼにあたる音節は、シェ・ジェとしてあらわれる (村山氏が指摘)。例を追加して説明する。

アシエ (汗), フシエ (着物のつくろい), カシエスル (助ける) 《加勢する》, カジエ (風), コメミシエ (穀物店) 《米店》, オクイシェンツ (葬式をしないところの), シエ (背), シエビ (滑車) 《せみ》, シェク (祝日) 《節句》, シェク (強く押す) 《急く・塞く》, シェケ (世界), シェマカババ (狭い街路), シェンショナシ (非常に質素な) 《僭上無し》, シェンドウ (船頭), シェンモン (ほんとうに), シェンモト (葱), シェン (干), シェワヤク (心配する), シェワント (傷心の), トジェ (境界) (村), トジェンナカ・トジェンネツ (つまらない・淋しい) 《徒然無い》, ウナジェノケ (豚の剛毛), ウッシェンツ (投げ捨てないところの), ジュサシェン (奴隷化する) 《自由にさせない》など合計50例を数える。

ai 二重母音の縮合によるセはシェとならないと考えられる。例えば、ニセ (青年) 《二歳, 但し、新背^{ニヒセ}をもとの形とするならば二重母音の縮合とはならない》, ニセウシ (若い牡牛) など。タクセ (多く・…より多く) もシェではない点からすれば、二重母音の縮合形か。なお、

ei 二重母音はカシエスルの例でもわかるように、シェとしてあらわれる。

- (13) i と a とが連続するとき、わたりの j が生じる。例えば、キリヤウ (切りあう) (村山氏が指摘)。

ファイエ (腫れ) などの例にみる r 子音脱落后の je 音については、イエダ (枝)・イエ (画・家) のように語頭にもあらわれることや、現在の薩隅方言にもエ母音自身が強い口蓋性をもっているのでは、わたりとしての j が挿入された例ではない。

- (14) 四つ仮名の区別がある (柴田氏が指摘)。

○ジ

アンジルコト (謎) 《案じること》, ツジマキ (旋風), フツジ (羊), フツシノアシ (羊の足), フツジノカワ (羊の皮), フィヨジ (軍人の上着) 《兵士か》, イチファジマイ (最初から) 《一始まり》, イコクジン (大使) 《異国人》, クジラ (鯨), ニジン (人參), サジ (匙), ジ (字), ジカク (書く) 《字書く》, ジミロ (燭台) 《心炉》⁶⁾

○ヂ

ヂ (祖父), チツクイ (農民) 《地作り》, チダ (地), チゴク (地獄), チナカノウミ (地中海), チノト (地の), フェナヂ (鼻血), フィノチゴク (火の地獄), フタヂ (乾燥した土地),

フタヂ (曾祖父), カヂ (舵), カヂ (鍛冶屋), カンヂヤ (鍛冶屋), ミスヂ (身筋), オヂ (叔父), スヂ (筋)

○ズ

コズ (寺男)《小僧》, マズル (混ぜる), スズ (錫), スズメ (雀), スズムシ (こおろぎ), ズウェ (樹枝), カシノズウェ (榿の枝)

○ツ

ツヅ (唾), ツヅ (通訳)《通事か》, チョヅダレ (水盤)《手水盥》, ズモル (どもる), ズモイ (どもり), ズモルコッ (どもること), ズルコッ (出る事), ツク (頂上), コヅミ (堆積), ミヅクルマ (水車), トイツナ (手綱)《取り綱》, ウヅ (深淵)。

語末のジ・チ・ズ・ツの音は、まだ内破音化していなくて母音の無声化の段階ではあるが、表記上は次のように明瞭に区別されている。(一部の語は無声化もしていない)。

○ジ

fcúz (羊), fcúzno af (羊の足), fjóz (軍人の上着)

○ヂ

fanádzi (鼻血), sudz (筋), ftà dzi (乾燥した土地); ftadzi (曾祖父), kádzi' (舵), kadz' (鍛冶屋), mísudz (身筋), ódzi' (叔父)

○ズ

kózu (寺男), súz (錫)

○ヅ

cúdz (唾), cúdz (通訳), údz (深淵)

表記体系として、[z]・[ʒ]・[d] にあたる別々の文字をもっているロシア字であるので、音価も表記通りに、ジ [ʒi]・[ʒi], チ [dzi]・[dzi], ズ [zu]・[zu], ツ [dzu]・[dzu] と観察されていたと考えられる。

(15) カ行合拗音の存在 (柴田氏が指摘)。例を追加する。

ファチグワツ (8月), ゴグワツ (5月), クグワツ (9月), クワシ (糖蜜菓子), クワシユイ (メロン)《菓子瓜か》, クワゴト ナカ (食欲不振), ログワツ (6月), サングワツ (3月), スイクワ (西瓜), ジュグワツ (10月), ニグワツ (2月), シグワツ (4月), シチグワツ (7月), ショグワツ (正月), スグウイ (真直に)。

(16) ui から変化した中舌母音 i が表記されている (柴田氏が指摘)。

村山氏も『スラヴ』の解説中に、篩の語形分布図について説明を加え、当時の i 母音を「18・19世紀の日本の学者にとってはそれを表記するすべがなかったし、表記するすべが知られている現代ではそれは消滅して存在しないのである」として、ui>i>e, i の変化過程をとどめた表記としている。現在の薩隅方言区画内に中舌母音をもっているのは、トカラ列島の小宝島・宝島であるが、これは奄美方言との関連を考えた方がよいであろうし、『日本語地

図』(国立国語研究所編, 以下『地図』と略称)の13図にみられる揖宿郡喜人町前之浜の*i*母音は, ヒガシ(東)のシ音にあたるもので, 村山氏の指摘通りいずれも *ui>i* の例には該当しない。以下に*i*用例をあげる。

aci (暑い), *cītac* (一日), *farag-rīsur* (冗談いう)《腹ぐるいする》, *fidari* (餓え)《ひだるい》, *ftōci* (一緒に)《ひとつに》, *ftōci nar totu* (一歳の赤ん坊)《ひとつになる赤ん坊》, *furi* (飾), *kcī kaze* (烈風)《きつい風》, *nime* (縫目), *sīčor* (愛する)《好いている》, *sido* (水道), *sika* (酸っぱい), *sikwa* (西瓜), *sīfo* (水晶), *sugwī* (真直に), *kcī* (はげしい)。

(17) オ列長音の開合(『スラヴ』で村山氏は長音短呼という項目のみをあげる)。

開音はオ列音に, 合音はウ列音に短呼されているという現代九州方言の傾向は, 既にこの文献にみえている。

○開音

アコクロ(タやけ)《明う暗う》, アンコ(鮫鱈), ボズ(僧侶)《坊主》, ツクショ(家畜)《畜生》, ハヨ(速く)《速う》, ファンジョニン(産婦)《繁昌人》, フィョロガツイェ(兵糧不足)《兵糧が費え》, フォキ(箒), フォソ(痘瘡)《疱瘡》, イッスンボ(一寸法師), イェクロタサタ(酩酊)《酔いくろうた沙汰》, イェクロトント(酔った), イェノミヨジョ(宵の明星), ヨジ(楊枝), カロ(元老院メンバー)《家老》, コボチョ(小庖丁), ココスル(孝行する), コロ(香炉), コサンニン(捕虜)《降参人》, ムコ(向う), オサマ(王), オショタチ(僧正たち)《和尚たち》, スイド(水道), スヨ(凡て)《総様》, ショガ(生薑), ジョ(錠), ジョゴ(漏斗)

○合音

キニュ(昨日), キュ(今日), コシュ(胡椒), コズ(寺男)《小僧》, スヨ(凡て)《総様》, シュベン(小便), ウアメ(大雨), ウバ(大歯), ウバロン(孕んだ)《大腹の》, ウカ(多く, 可なり, 大いに)《多か》, ウカジェ(暴風雨)《大風》, ウミミ(大耳), ウムギ(大麦), ウプテ(大額)

例外は, ショチュ(葡萄酒)《焼酎》のみである。euはシュベン(小便)でみるように, ウ列音になるはずである。

また, モラウ・ワラウはオ列長音化していない。

(18) 前記以外の長音短呼

○iu>u:>u

ユ(言う), カリュド(捕鳥者)《狩人》, ジュ(十), ショチュ(焼酎)

同様の例として, ジュ(自由), ジュナッ(自由な), ジュナコッ(自由な事), ジュネコッ(自由のない事・奴隷化), ジュフォシガル(自由を欲しがる), ジュニネッ(自由でないところの)などのジュはジイウ>*ジュー>ジュという変化をしている。

○uu>u:>u

ユメシ (夕飯)

この他, (10) の oi・ai・ei 連母音の縮合短呼の例も参照。

(19) 母音交替 (村山・柴田両氏の指摘なし)。

○ i→u

ツクシヨ (家畜) (畜生), ユルイ (炉) (囲炉裏)

○ o→u

ツンプ (つんぼ), ネドク (ベッド) (ねどこ)

○ u→o

フォノノノ (帆布), カンノキ (かんぬき)

(20) ラ行音のダ行音化 (『スラヴ』のダンギの項の注に「ラの音は屢ダと発音する」とのみ指摘がある)。

ダシャ (羅紗), ダクナ クニ (自由都市) (楽な国), ダクナ シュジナ シシャ (自由な種々な学問), デクレク (主人) (歴歴), ディヨミチ (ふた道) (両道), ダンギ (棒杭) (乱杭), ドヤ (牢屋), チョガイヤ (両替屋)

(21) 濁音節の前に撥音が挿入される語形がある (村山・柴田両氏の指摘なし)。

アザナンド (発疹) (あざなど), ゴンジュ (50), カンヂヤ (鍛冶屋), クンジュ (90), タンゴ (桶)

この撥音表記は, いずれも n であるので, これらの用例からは濁音節の前の鼻音的わたりと考えるよりは, 撥音節の挿入と考えた方がよい。

(22) 若干の語では, 語中尾の bu 音節が w へ変化している。

asuw (遊ぶ), jów (呼ぶ), kcuawne (辛じて) (きつうあぶない)

これは, bu>*b>*Φ>w という変化過程を経たと思われる。因みに, ロシア文字は母音の u にあたる文字を別にもっている。

この他, 柴田氏の『漂流』の書評中に「fa がある。fa『齒』」との指摘がある。ハ行子音が両唇摩擦音であるとの指摘である。これは, 大津不二也氏のように「薩摩方言の史的研究」(『宇部短期大学学術報告』9号)で『スラヴ』を利用して, 『薩摩方言でも江戸時代前期までは f の段階を保持していたことが知られる』というように解釈するためには, 大黒屋光大夫の資料のハ行子音の x 表記(フを除く)と比較して音価を決定する必要がある。薩隅方言内では, 上甌島・種子島南部・屋久島できかれた語頭の〔Φ〕と関連づけることができるか。『漂流』の253ページにこのハ行子音の変遷についての指摘がある。

以上が, 『露日』・『会話』・『スラヴ』・『文法』を資料として, 村山氏や柴田氏が指摘している項目と, 筆者の調査により整理し加えた用例・項目の概略である。本稿では音韻面の説明を中心にしており, 文法や語彙の諸現象については別稿に譲る事にする。

次に、村山氏の訳語と標出語との比較をすると、以下のような逐語訳や両者の不適当な対応がみられる。

アカカヨカサケ (赤葡萄酒), アマザケ (ビール), アタマンナッカドゥ (頭の無い胴), アヲモイ (ウォッカ), ブクブク (頭頂部), ブギョ (軍司令部), チェンネン (世捨人, 『スラヴ』ではテンニン), ツチノナカンユ (温泉), チェップンツムルシコ (弾薬筒, 装薬), チガ スクナカ (貧血), デナカノウミ (地中海), フェダギ (ルバーシカ), フェ シロン (都市の城壁) 《塙城の》, フィョブギョ (陸軍大佐), フィョジ (軍人の上着), フォドケ カミノ イキ (聖霊なる神), フォドケ ムスコ (息子なる神), フォドケ トト (父なる神), フトトキ フェン (一時間半) 《一刻半》, フワフワ (オムレツ), イコクザ (税関), イコクジン (大使), イタゴン トウ (かさぶた), ヨツゴテモッタイキモン (四足獣) 《四つ五体持った生物》, ヨカアマザケ (上等のビール), ヨカサケ (ライン葡萄酒), カベ イシノ (石の壁), カキノキ (林檎の木), カミノイキ (聖霊), カロ (元老院メンバー), キカミ タマゴン (卵黄), キンチュ ウチ (宮殿), クニ フトンウカ (人の多い都会), マプタ (ひとみ), メノケ (眉) (まつげ), メツキスル (瞬間), メリヤス (靴下), ミツオトシ (心臓病), ナカグニ (地中海の場所), ニュボモツフト (婿), オモチェ フネン (舳先), スケモンスケル (支えをおく), ショチュ ヨカ (上等の葡萄酒), シトミ タマゴン (卵のしろみ), ウスカ アマザケ (うすいビール), ジュシェン (十千) 《一万のこと》, ムツキ (六月) 《六ヶ月の意のはず。他にロクグツツ, シモツキ, シワスの語形もある》, タカ (鷲), ウラオモテ (透して), ジュズダマ (硝子玉)

これは、村山氏が『漂流』の解説文でボグダーノフの「積極的な指導によってゴンザに幾つかの日本語参考書を書かせたのである。しかし、それらはゴンザひとりの労作ではなくて、正しくはゴンザボグダーノフの共同労作である。」という、その実態がうかがわれるように思う。例えばミツオトシは、『地図』130図「みずおち」で、始良郡福山町・垂水市牛根町麓、垂水市柘原、肝属郡佐多町辺塚にみられる MIT'OTOSI と同じであろう。また、町田佐熊編『訂正増補 鹿児島語と普通語』(吉田書店刊。筆者は大正元年の5版を利用した。初版は明治38年)にもミゾオトシ(みぞおち)と記載がある。恐らくは、ボグダーノフが心臓のあたりに手をあてて、ゴンザに対応する日本語を尋ねたので、「心臓病」という訳語とのずれが生じたのであろう。他の人体名称のずれも同様に考えられる。その他、ビール・葡萄酒などの例からみても、日本語からロシア語への置きかえというよりも、ロシア語から無理をして日本語に逐語訳をしたとみるのが自然である。この点から考えると、辞典や文法書の完成にはかなりボグダーノフの手が入っていると思われる。例えば、前述のような意味に関する例だけでなく、精密な語形表記をほこっている『露日』にも、村山氏が指摘している fjub' (蛇), nogajúr (浮流する) という例の他にも、フェラノ トカトント (満腹の) という意味不明の標出語がある。これはフェラノフトカトントならば訳語とも一致するので、恐らくフという語頭の母音の無声化した音節を聞き落したためにおこった例であろう。つまり、ボグダーノフは標出の日本語形の表記にも関わっていた可能性があるのである。

次に、前にもふれたが、『露日』・『会話』と『文法』・『スラブ』との語末無声化の表記法の違いについてであるが、村山氏は『漂流』の「ロシア字転写の原則」で次のように述べている。

片仮名による転写では、ロシア子音字のみがしるされるとき、又は子音字プラス「軟音符」のみがしるされるときは、それに相当する片仮名の下に○印を附した。当該音節の母音の無声化乃至収縮を示す。

ここで村山氏は全くふれていないが、母音の無声化音節に片仮名をあてる場合、イ列音・ウ列音・オ列音の三種の片仮名を使い分けてあてる基準を設けているのである。本文中の用例から帰納すると、その基準は次のようになる。

○イ列音の片仮名…子音字+軟音符。j・č・z・dzの子音字（軟音符なし）。

af アシ, akub' アクビ, am' アミ, běčtokore ベチトコレ, cuk' ツキ, cūr' ツリ, fádag' フェダギ misudz ミスヂなど。

○ウ列音の片仮名…j・č・z・dz・tを除く子音字（軟音符なし）。

áckasba アツカスバ, fúr フル, fně フネ, boz ボズ, bukbuk ブクブク, cúdz ツツなど。

○オ列音の片仮名…語中尾の t 子音字（軟音符なし）にトをあてる。

akákat アカカト, jokakótnot ヨカコトノトなど。

この表記基準は、母音脱落前の語形を考慮してたてたものであろう。これに対して『文法』と『スラブ』では、無声化を示す○印をつけていない事と、t をツ表記するという片仮名表記上の差異がみられる。

これは、ゴンザの資料を整理してみると、ロシア字の表記法自体が音声と対応したかなり精密な表記体系をもっている事から、それを生かそうとして村山氏が案出した規準と思われるし、実際に有効な表記法である。

ロシア文字の表記法から、日本語の母音無声化を表わす表記上の区別を整理すると次のようになる。

①軟音符を付する事によりイ列音の無声化を、また、付さない事によりウ列音の無声化を示している。

dakna kun' (ダクナ クニ), dek (デク), dedokor (デドコル), dzinakáno úm' (チナカノウミ), fádag' (フェダギ), famagún' (ファミマグニ)。

一方、これらの例が無声化ではなく、母音脱落の現象を示しているのではないかと解釈できる。しかし、それはゴンザの資料中の撥音・促音表記との関連を調べる事により、検討できるはずである。

ここで、『露日』中の撥音・促音表記の用例を調べる。

○撥音

○m 表記

dámma (雌馬), jamme (病), nommon (飲物), jomfto (読む人), mba (祖母),
mma (馬), mmaja (馬小舎), mmáje cuk (生まれつき), mmajeta totu (生まれた赤ん坊),
mmaku (甘く), mmakata (馬車の馭者), mmancme (馬の蹄), mmanfně (まぐさおけ),
mmankě (馬の毛), mmanko (子馬), mmankso (馬糞), temma (ボート)

いずれも次に両唇を調音点とする音がかかる点で、現代の撥音と同じである。例外は次の13例である。

bánmadže (晩まで), cunbu (つんぼ), činba (跛), činban (跛の), ikénmo (様々に),
issunbo (一寸法師), mmanfně (まぐさおけ), konátanmaje (自分), sanbe (三倍),
sanbjak (三百), jenmon (ほんとうに), jenmoto (葱), jínme (新鮮な穀物)。

○ n 表記

これは次に来る子音に関係なく使われている点で、音声表記というよりは日本語の「ン」
仮名と同じ機能をもっているといえる。

andon (燭台), anko (淡水魚ひげ), anóftont (彼の), anzirkot (謎), atamannakka du
(頭の無い胴), atonfo (後へ), bánč'kě (晩方), bann (晩), bensařib' (くすり指),
bugenřant (富める), ftotók' fann (一時間半), gořenn (5000), jámařn (狼), sánn
(3) など合計169例。

このうち、n・řn・nn の区別はないようである。řn はヤンメ (狼) の1例のみ。nn は
語末にしか使われず、「半・年・千」などの語構成要素に多く使われている傾向がある。

なお、ŋ にあたるロシア文字はない。

○ 促音

○ p 表記

čéppu (兵器), fjáppjak (800), kappa (袖なし外套), loppjak (600)

○ t 表記

čitto (少し), fjátt (常に), motta (持った), káttořu (列で), kmottář' (曇った日)。

○ k 表記

ářkkara (彼処から), atamannakka du (頭の無い胴), fikkagam' (膝の下), ičřakara
(最初から), kokkara (此処から), núkka (暖かさ), núkkatont (暖かい), řakara (以
前)。

○ č 表記

asáčče (明後日), táččor (立つ)

○ c 表記

jácc (8), micc (3)

○ s 表記

issunbo (一寸法師)

○f 表記

fɪʃa (羨びた)

子音を重ねて表記する点は、現代日本語の音声表記と同じであり、撥音の表記体系は異っている。

しかし、いずれにせよ、撥音や促音を表わす表記法は、前記の無声化とははっきり区別されている事がわかる。従って、軟音符の有無は、促音・撥音のような母音の脱落したものではなく、母音の無声化を示していると解釈できるのである。

これに対して、シ・ス・ジ・ズ・チ・ツ・ヂ・ヅの表記体系は、この母音無声化とは異った体系を示す。

②軟音符は使わず、それぞれの子音字のみで示している。例は一部のみを掲げる。

シ…ʃ チ…č (č')

ス…s ツ…c

ジ…ʒ ヂ…dz

ズ…z ズ…dz

○シ…ʃ

aʃ (足), fánaʃ (歯無し), faʃ (橋) (周囲), bénsaʃ íb' (くすり指), íʃ (石) (啞), káʃ (櫂)

○ス…s

dás (徐々に注ぎ出す), kakùs (匿す), karás (烏), kíbìs (くるぶし), kónas (侮辱する)

○チ…č

fáč (鉢) (蜂) (皿) (8), firač (谿谷), firokà mič' (広い道), fokúč' (ほくち)

○ツ…c

fač'gwác (8月), fíc (トランク), gojonomac (西洋すぎ), icúc (5)

ジ・ヂ・ズ・ヅの四つ仮名については(14)の項参照。

チについて、一部に軟音符のついたものがあるが、例も少なく表記法からみれば余分である。これらを見ると、①のように軟音符の有無で、イ列音・ウ列音の無声化を区別しているわけではなく、子音字そのもので区別しているのがわかる。表記法上からするならば、①を考慮に入れ次のような表記法も可能なはずである。

シ…s' チ…c'

ス…s ツ…c

ジ…z' ヂ…dz'

ズ…z ズ…dz

一方では、 $f \cdot s \cdot z \cdot c$ の文字は促音の表記として細かく使い分けられている。

これらの点を考えれば、②の表記体系から帰納される音価は、母音の無声化ではなく、次のような母音が脱落した語形とも考えられる。

シ…[ʃ] チ…[tʃ]
 ス…[s] ツ…[ts]
 ジ…[ʒ] ズ…[dʒ]
 ズ…[z] ヅ…[dz]

更に「水」という語のように、*ámamíc* (雨水), *awa míc* (水の泡), *awabúk mícnouje* (水上の泡), *fanamídz* (聖水), *mízd kúrma* (水車) の例では $c \cdot dz$ 両様の表記をもつ語がある点を考えると、一部の語では語末の有声子音音節がすでに無声化する傾向にあったようである。もちろん、この表記体系は、摩擦音・破擦音という口蓋性をもった子音では子音字のみ、他の子音は軟音符の有無でイ列音ウ列音の無声化を表記し分けているという補完的關係を示しているとも言える。

筆者は、現代の薩隅方言全般からみても(穎娃地方のように語末に /s/ が認められる地域があるにはあるが)、また、語末の鼻音系子音をもつ音節の母音脱落はあまり区別しないが、摩擦音・破擦音系の子音をもつ音節の母音脱落は厳密に区別するという音韻体系は無理であろう、と考える。従って、ここでは一応①・②ともに母音の無声化を示していると解釈しておく。

この厳密な表記法を前提にすると、(19)の母音交替に次の例が追補できる。

○ $i \rightarrow u$

ツクノヨ (月の夜), フツヅ (羊), フツヅノアシ (羊の足), フツヅノカワ (羊の皮), フィフテアサカラ (朝から一日) 《ひして朝から》, フィフテゴシ (一日ごし) 《ひしてごし》, フカゲ (日陰), フカイモン (雷光), フカイモンガ フカル (雷光が光る), フト (人), フトツ (1), フトツイ (一緒に), フトツイナル トトウ (一歳の赤ん坊), フトツヨニ (等しく), フトツトシノ (同一年の), フトサシイビ (人差指), フトトキファン (1時間半), ヤクフト (燥く人), ヨカ ノムモン (良い飲物), ヨムフト (読む人), カルフト (刈る人), クツイカジェ (烈風), クツアウネ (辛じて) 《きつくあぶない》, ヌフト (裁縫屋), オヤスフト (養育者), オルフト (織工), オワフゲ (口ひげ), シンダフト (屍), タシナムフト (保存者), ウタウフト (歌手)

○ $u \rightarrow i$

キチネ (狐), サンゴジ (サファイア) 《珊瑚樹》

さて、以上列記したような言語特徴をもつゴンザの言語は、現在の薩隅方言との比較によりどのような違いがあるのかを次にみていく事にする。

薩隅方言の文献資料としては、このゴンザと現代との間が文献上空白になっているわけではなく、

篠崎久躬氏が『九州方言の基礎的研究』（風間書房刊 以下、『基礎』と略称）であげているように、断片的なものも加えれば、次のような資料がある。

- 物類称呼（西国・九州・大隅・薩州・薩摩・指宿の注記がある）
- 倭訓栞（西国・九州・薩州・薩摩・種子島・大隅の注記がある）
- 松屋叢考（西国・薩摩・鬼界島・屋久島・トカラ列島の注記がある）
- 茅窓漫録（西国・薩摩の注記がある）
- 大新板 国なまり はいはいぶし（薩摩の注記がある）
- 大隅国風土記逸文
- 柳亭記（薩摩の注記がある）
- 大和口上物語集（江戸末期の琉球人のための日本語習得書）
- 平家女護島（近松門左衛門）
- 大和口上（文化6年〔1809〕成立、琉球人のための日本語習得書、文語体）
- 大和口上言葉集（幕末の琉球人のための日本語習得書）

しかし、いずれもゴンザの資料と比較すると、質量ともに劣る資料であり、語の意味記述についてのみの資料が殆んどである。他の文献との比較検討は、資料の性格が異っている事もあり、補足的な解説の部分についてのみあつかう。

ゴンザの資料と現代の薩隅方言の比較については、すでに柴田氏が「現代の薩摩（鹿児島市などを除く）地方の方言の特徴と一致する」としているように、現代の鹿児島市には殆んどの特徴が残っておらず、周辺地域に残存している。因みに、ゴンザの出身地は『漂流』によれば、ボグダーノフの資料中に「サツマ市」の出身とある。同資料が島津継豊を「サツマ市の領主」としている点からも、村山氏は今の鹿児島市が「サツマ市」であろうとしているが、筆者は『地図』や『基礎』を参考にして、今の鹿児島市の方言と比較を限定せずに、薩隅方言の地域全体を考察の対象とする。これは、単にボグダーノフの資料で「サツマ市」が厳密に今の鹿児島市と決められないというためではなく、むしろ文献の時代性を重視しての事である。

- (1) この現象は、現代の薩隅方言全般にみられる現象である。
- (2) 『基礎』で上村孝二氏は薩南地方・肝属郡東部から嚙啖郡南部・南種子島・屋久島の一部にきかれ、また、接続助詞の「テ」の〔tje〕なら薩摩地方でもきかれるとしている。文献では、倭訓栞が豊後の言葉として「ちえっふう」（鉄砲）、「きのふ見ちえ」と記載し、逆に薩隅方言の資料である大和口上言葉集の方では、「いふち来るなり」となっている。過去では薩隅方言のもっと多くの地点でみられた現象であろう。
- (3) 『基礎』では、r子音が脱落しないのは、上甌の一部・種子島の北部のみとしている。現代の薩隅方言全般にみられる現象が、すでにゴンザの資料にあらわれている。
- (4) 薩隅方言全般についての調査報告はないが、『嶋戸』に「雫」をシュヅツ、「染み」や「染

み込む」をシュン・シュンコン、「痛む」をシュンとしており、鹿児島県教育会編『鹿児島方言集』（国書刊行会刊）でも「しゅ（汁）」・「しゅん（侵み）」・「しゅわ（皺）」となっている。出水でも「シュイ（汁）」・「チジュン（縮む）」・「ナジュン（馴染）」・「ヒッカジュン（ひっかじむ）」という井島六助氏の報告がある（『出水方言—カゴシマ語の一特異分野』私家版）。かつては薩隅方言地域全般に行なわれていたか。

- (5) 『地図』136図の「男（おとこ）」の語形分布図によると、枕崎市・額娃町・開聞町に odogo の語形がみえる。南薩地区にのみみられる特徴的な現象である。なお、『地図』にはあらわれないが、日本放送協会編『全国方言資料』第9巻へき地・離島編 III によると、屋久島の宮之浦や阿久根市大川尻無小麦に語中の t・k が有声化することが報告されている。大川地区での柴田氏の解説では他の地区より「一段階古いものを示している」との指摘がある。筆者の調査でもこの地区の有声化は確かめられた。ゴンザの資料中にこの現象にあてはまる語彙が少ないという事はあるが、かつてはもっと広い地域でみられた現象であろうか。
- (6) 『基礎』の上村氏によると、甑島・種子島・屋久島などの離島にはない。また、出水地区では [hatʃi]（蜂）・[kubi]（首）のように、母音の無声化が多いということである。語末のシ・ジについては、『地図』の13図に「東（ヒガシ）」のシの音、15図に「火事（カジ）」のジの音の分布図がある。この13図では、殆どどの地区が母音の無声化現象をおこし、15図ではかなりの地区が「ジ」の子音を無声化して [ʃi] と発音しているが、子音が無声化しない地点も16を数える。この分布図からみる限り、前述の解釈のうち母音脱落を示すというより、①②2種の表記により母音の無声化を表記していると解釈する方が説得力をもつか。また、分布図中無声化していない地点では、共通語形の普及による一種の回帰現象もおこっているとみるべきであろう。
- (7) 離島と大隅半島の一部を除いては、ミ・ム音節は撥音化している。また、語末のニ・ヌは薩隅方言の全地域で撥音化している。額娃町では、ギ・グ・ヅ・ビ・ブの各音節が撥音化するが、前述の如くゴンザの資料では母音が無声化する段階を示している。この点では、前掲の撥音化のみられる地域は、他の地域に比べて新しく変化した言語要素をもつ地域であるといえる。
- (8) 形容詞のカ語尾イ語尾については、従来よりかなりの研究がなされているが、『基礎』などにより概略的にいえば、薩摩半島（特に出水・伊佐地区）・甑島・種子島がカ語尾優勢、大隅半島（始良郡から肝属郡・嚙啖郡はイ語尾優勢）・屋久島がカ・イ語尾併用である。『地図』から「ふとい（太い）」のカ・イ語尾分布図を図3として示す（なお、必要の要素のみわかりやすいように示したので、符号の使用法は『地図』とは異なる）。文献では、既に万暦17年（1589）刊の『日本風土記』にカ語尾がみえる。
- (9) 『基礎』に九州における方向を示す助詞の一覧表がある。それによると、サメ・サネ・サイ・サン・セー・サミヤー・サエなどサメ系の語形がある一方、鹿児島市・日置郡・川辺郡・開聞町・佐多町・鹿屋市などにはサメ系の語は報告されていないが、恐らく以前は薩隅方言の

地域全体にわたってサメ系の語が分布していたと思われる（例えば、鹿児島市方言を記述した渡辺綱鋳氏の『鹿児島方言』（私家版）では「方角を示す助詞」として「さえ」が記載されている）。

(10) ai, oi, ei 各連母音に分けて述べる。

○ ai>e…『基礎』に大根（ダイコン）の ai 連母音の音価が地図化されている。同書の上村氏の解説によると、甕島・種子島を除いて全てデコンの語形をとる。種子島では [ai] または [a:]、甕島では [ai, e:, ja, æ:, a:] などの音価をとる。

○ oi>e…上村氏の解説によれば、oi>e（例えば、[we] 《甥》）は、oi>i となる噌嶽郡・肝属郡の東部を除いた薩隅方言全域にみられるという。図3参照

○ ei>e…『基礎』では「時計」に対して殆んどの地点が [tokei] と答えているが、これは共通語形があらわれたものである。同書の上村氏の解説によれば、一般には [me] 姪, [tene] 丁寧, [gore] 御礼, [kase] 加勢のように e としてあらわれる。但し、大隅半島南部では、[mi] 姪, [gori] 御礼, [kafi] 加勢としてあらわれるという。

(12) この現象については、『地図』の7図（セナカ《背中》のセの音）、8図（アセ《汗》のセの音）、9図（ゼイキン《税金》のゼの音）、10図（カゼ《風》のゼの音）、『基礎』のオーゼキ（大関）の語形一覧表、センセー（先生）の分布がある。ここではセ・ゼ音の分布がみられる『地図』の8図・10図を図1・図2として示す。この分布図によると、鹿児島湾（錦江湾）沿岸や南薩地区・屋久町などを除いて全般にシェ・ジェの音が分布している。『基礎』のセンセーの分布図では、大隅半島南部を除いてシェ音の分布が少なくなっているが、上村氏の解説によれば、甕島では一時代前まではシェ・ジェの音があり、大隅始良郡南部から薩摩半島の薩摩郡東部では口蓋化音がきかれ、穎娃町ではネがニェとなり（ニェゴ《猫》、フニェ《舟》、マニェ《真似》）、大隅高山地方でも戦前ではきかれたとなっている。文献国語史によるセ音の変遷を考えても、古くは薩隅方言全般にシェ・ジェの音がきかれたであろう。

紙数の関係で、他の項目についての考察は省略するが、例えば、四つ仮名・カ行合拗音・オ列長音の開合などは、この文献の時代性からいっても、方言音の絶対年代が定置できるという他は特に異とするにあたらぬ。むしろ、ui>i の変化による中舌音の存在や長音短呼の現象がおこっている事など、更には現代の地域でゴンザの資料の音韻体系に近い体系をもつ地方は南薩地方であるとかが興味をひくが、これらについての検討は別稿に譲る。

井上史雄氏は「鹿児島方言有声化の相対年代」（『方言研究年報』続4）で、揖宿郡郡山町大山方言の諸特徴から、言語変化の相対年代を想定しているが、ゴンザの資料については次のように言っている。

これによると狭母音脱落は、まだやっと (①) で言っても b の段階（語末狭母音の脱落—筆者注）に達しただけである。しかし長母音の短母音化は起こっていたと思われる。ただしカ行タ行子音

の有声化についてはヒントが得られない。

氏の論は大筋としては支持できるが、ゴンザという絶対年代をもつ資料とつきあわせると問題がでてくる。特に前掲の(5)・(6)については筆者の分析とくいちがう。当詳地域の記述が、薩隅方言有声化の変化過程の全てをチェックできるか、つまり、現在の大山方言にみられない要素で、有声化への変化過程に必要な要素はないかなどの点については、特に言及がないようである。

注

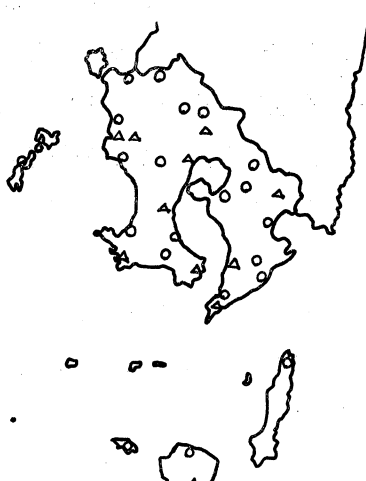
- 1) 「薩隅方言の区画」(『日本の方言区画』所収、東京堂刊)
- 2) 村山氏はアクセントの違いがあらわれているとしているが、柴田武氏の『漂流』の書評(『国語学』68輯)で、その価値に問題がある旨の指摘がある。
- 3) 村山氏はフネンと転写しているが、ロシア字の綴りからフネンと訂正した。
- 4) 『露日』ではファグケとなっているが、ファダケと訂正。
- 5) 注2)の書評
- 6) 和名抄(十巻本・二十巻本ともに)に「燈心和名度宇之美」とあるによる。

図1



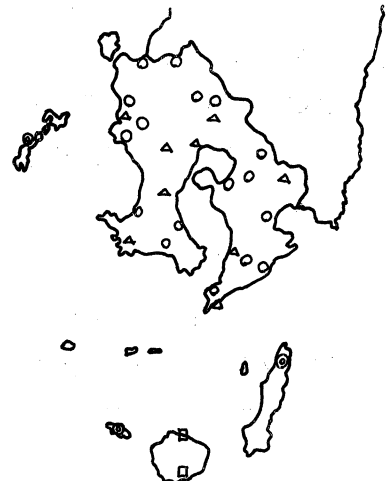
- 3e (ze を含む)
- ◎ d3e
- △ ze
- de

図2



- se (se も含む)
- △ se

図3



- HUTOKA (HUTTOKA も含む)
- ◎ HUTOGA (HUTTOGA も含む)
- △ HUTE
- HUCI